

# 小学校図画工作科における児童の創造性を育む環境づくり

-空間に関する実践題材を通して-

群馬大学大学院教育学研究科教育実践高度化専攻 授業実践開発コース

目崎 智美

## 1. 研究の背景及び目的

### (1) 研究の背景

小学校学習指導要領(平成 29 年告示)解説図画工作編(文部科学省、2019)における改訂の趣旨において、中央教育審議会答申では、課題を次のように示している。「感性や想像力等を豊かに働かせて、思考・判断し、表現したり鑑賞したりするなどの資質・能力を相互に関連させながら育成することや、生活を美しく豊かにする造形や美術の働き、美術文化についての実感的な理解を深め、生活や社会と豊かに関わる態度を育成すること等については、更なる充実が求められる」と示されている。(文部科学省、2019、p6) 具体的な目標として、表現及び鑑賞の活動を通して、生活や社会の中の形や色などと豊かに関わる資質・能力を育成することを一層重視し、育成を示す資質・能力の三つの柱のそれぞれに「創造」が位置付けられている。また、造形的な創造活動において育成すべき能力のために、児童が自己と対話を重ねながら、他者や社会、自然や環境などの多様な関係の中で活動することによって培われると示されている。

これらのことから、主体的にものや人が関わり合う環境づくりにアプローチ

していくことによって、その過程の中で児童が自ら創造していくための力がよりよく育成されると考える。なお、本研究においては小学校学習指導要領(平成 29 年告示)解説図画工作編(文部科学省、2019、pp62-63、pp84-86)に、「材料や場所、空間」について示されていることを受けて、「材料や場所、空間」を含めて環境と捉えるものとして研究を進めることとする。

子どもの創造性を育む活動と環境づくりとして、レッジョ・エミリアの幼児教育がある。レッジョ・エミリア・アプローチは、「子どもの学びに寄り添い想像力と創造性を育む教育哲学」(秋田、2022)である。「レッジョ・エミリア・アプローチ」の礎を築いた教育哲学者であるローリス・マラグツィの詩「子どもたちの 100 の言葉」にあるように、無限の可能性を秘めた子どもたちを、大人と同じ「市民」として対等に向き合い、問いかけ、語りかけ、子どもたちの創造性を引き出すことに重きが置かれている。活動の中心となり、創作活動を手伝うアトリエリスタが子どもの言葉を引き出す姿や子どもたちの生活や土地との関わりがある素材を用いながら心地よい環境づくりをする姿は、本研究における

環境づくりを考える上で興味深い実践である。これらのことから、小学校教育においては、幼児教育での経験を活かす等、学びのつながりを活かした環境づくりが有効であると考えられる。さらに、自ら環境づくりを考える中で仲間と心地よい空間を模索していくことは社会でよりよく生きること（Well-being）につながる。

## (2) 目的

本研究の目的は、児童が自ら創造していく力を育むための環境づくりについて、図画工作科の授業を通して検討することである。

## 2. 研究の方法と内容

### (1) 期日と対象

実践Ⅰでは、2023年7月7日、群馬県A小学校6年2組32名を対象に2時間の鑑賞題材を実施した。その後、2023年7月19日同小学校6年1組32名を対象に2時間の造形遊び題材を再実践した。

実践Ⅱでは、2023年10月27日～2023年10月31日にかけて、群馬県A小学校6年3組32名を対象に3時間の鑑賞題材を実施した。

### (2) 実践内容

実践Ⅰ「つくりたくなる図工室に」は、図工室にある机やイスなどのものを動かしたり、ダンボールや布、木などの素材を追加したりして、つくりたくなる図工室になるようにグループで心地よい場づくりをし、鑑賞し合う題材である。授業の導入部において、環境づくりの例として、機能的な面をもつ他校の図工室やデ

ザイン性のあるオフィスの画像を提示した。その後、再実践した「わたしのよりドコロをつくって試して、またつくって」は、布やダンボールを用いて、グループでつくって試して、考えて、またつくり、居心地を模索しながら場づくりする題材である。大きな変更点は、「鑑賞」から「造形遊び」にしたことだ。領域を変更したことによる違いを検証するために学級を変えて再実践を行った。授業改善の内容としては、材料の再選定である。理由は、「図工室にあるもの」では、材料にとらわれやすかったからだ。さらに「造形遊び」としたのは、自分なりの居心地を模索するために、試行錯誤しながら場づくりする活動は、必要な材料を集めて何か形をつくってみるという目的や結果よりも過程を重視している点で、造形遊び的要素が大きいと考えたからである。

実践Ⅱ「心地よい空間って？」は、知覚している空間において、図工室にある椅子や机などを用いて、自分と対象の距離や対象と対象の距離を変えながら心地よい空間をつくり出す題材である。1時間目において、校内で自分の好きな空間を見つける活動を行い、児童の特徴や特性、好みを基に筆者がグルーピングを行った。そして2時間目にグループに分かれて心地よい空間をつくり出す活動を行った。教師の間接的支援として、図工室の天井付近に紐を渡し、布を付けられる仕組みや図工室の机や椅子の数を減らし、設を変えた環境に設定した。また手に取りたくなる材料になるよう、形や色を基に並べ方を工夫した

### 3. 実践結果と考察

#### (1) 実践成果について

実践Ⅰでは、児童が空間を扱った活動をする際に必要となる、空間に対する意識をもつためには、空間をみる（鑑賞）過程が重要だと分かった。

実践Ⅱでは、空間の特徴を捉えながら、目指す空間と変化していく自己の思いを更新しながら創造していくなどの空間を意識することで伴う試行錯誤の様子が多くみられた。

#### (2) 題材における3学級の比較を通して

実践Ⅰの学級①において、図工室に表れた9グループの空間はダンボールなどの素材を中心に占め、開放されていない閉じられた空間が多かった。児童は心地よい秘密基地づくりの意識が強かったと言える。振り返りの中では、今ある環境で何ができるのか、児童にとっての心地よさを模索する様子を記述していた。授業後には「ここで給食が食べたい。」と発言し、達成感やつくった空間に対する愛着を実感した。空間を扱った題材として場と一体化した活動は達成したが、ねらいとした空間を意識した試行錯誤の姿は多くはみられなかった。

再実践Ⅰでの学級②では、主な材料を布とダンボールに再選定したことによって、図工室という空間を捉え、特定の場所に心地よさを見出す姿がみられた。そのグループは、あえて図工室の隅を選び、「子どもの隠れ家」をつくった。また材料と身体感覚に注目し、材料を組み合わせながら試行錯誤する様子もみられた（図1）。

振り返り

明るくて暗いしかしダンボールで囲まれていて暖かい(狭い?)空間をイメージしたテーマ



布とダンボールを組み合わせたことや布を2重にしたことにより温かみを出している。

良さはダンボールだけ→暗いしかし温度は暖かいが心は温もりがない

カーテンだけ→明るい温度はキープ心も微妙に温まる。ただ物足りない

2つを組み合わせると→明るく暗いそして温度は調整できており気持ちいいまたダンボールや布が合わされているので心まで温まるという良さ

図1 素材と身体感覚に注目した振り返り

一方で、図工室の隅を選んだ理由である「せまくて自分たちが好きなどころだった」は、図工室の中で空間を把握した上で、既にある児童の好む空間を選択して決定づけている行為である。空間の特徴を捉えながら、目指す空間と変化していく自己の思いを更新しながら創造していくなどの空間を意識することで伴う試行錯誤の様子が多くはみられなかった。故に、未だ空間への意識は弱いと言える。

実践Ⅱの学級③では、1時間目の校内で好きな空間をみつける活動では、心地よさの要素となる人との距離やものとの距離に注目しながら、自分にとっての心地よい空間と向き合う姿があった（図2）。

1番最初の写真は物に挟まれているため落ち着くがもしこれがこの距離で人だったら嫌だ。ここでは寄りかかって本を読んでいた。

2番目は四方に囲まれて落ち着く。

またこれがこの距離で人だったら嫌だ。

3番目は自然との距離が近いため、涼しい感じがする。人が写っているがこの距離感が1番BEST!ここではボ～としていた。

図2 1時間目振り返り

2 時間目の図工室で心地よい空間をつくる活動において、あるグループは、初めは図工室の廊下側につくっていた空間を日の当たる校庭側に移動させ、配置した。これは、一度つくった空間を外に近づけて再構成していることから、ものものの距離を工夫している。そして日の当たるあたたかい場所であるため、人とももの距離の視点も含まれている。視点を変えながら場を試行錯誤していたとみとった。さらに、高さに着目して、目指す空間になるように布の吊るし方を試行錯誤する様子もみられた。(写真3) によって本研究では、実践Ⅱの児童の姿が最もねらいに近い姿であったと言える。



写真3 高さに着目した活動の様子

#### 4. 総括

本研究では、図画工作科の授業を通して、子ども自身で必要な環境を考えらえるよう、心地よい空間を模索しながら子どもと教師による学びのデザインとしての環境づくりを目指した。前提として、高学年の児童を対象としても空間に関する題材を扱うことが初めてのことが多いことが明らかになった。しかし、「自分自身を取り囲む場所や、三次元的な奥への広がりなどへの働きかけにより豊

かな造形的な活動となるように、空間を示している」(文部科学省、2019、p85)のように、その必要性を示唆している。さらに材料の性質や人の動きなどの場所や空間の様子を含むものの特徴に働きかけ、材料の配置や場所の雰囲気などを検討する造形的な活動が求められている。

本研究においては、題材の中で児童が空間への意識をもつことを重視した。しかし、題材の中で児童が捉えた空間への意識が生活に生かされることをみとるまでには到達していない。実践を通して、実際に子どもの生活環境や空間においてこの活動が持ち込まれたとき、新たに創造される空間や環境も興味深い。さらに発展するとすれば、子ども自身がこれまでの経験を生かしながら扱ったことのある材料や必要な材料を提案し、集めることも可能であると考え。意味や目的が多く求められた管理的な場にいる児童や教師がよりよく生きるために、一人一人が秘めた可能性から自ら創造していくために、心地よくいられる環境づくりに貢献していきたいと考える。これからは環境や空間の中で生まれる機微に目を向け、模索し続けていきたい。

#### 引用・参考文献

- 秋田喜代美 (2022) 教育ビデオライブラリー74『日本のレッジョエミリア・アプローチ 100 のことば～想像と創造が生まれる教育のために～』、日本児童教育振興財団
- 文部科学省 (2019) 小学校学習指導要領(平成29年告示)解説図画工作編, p 6, pp62-63, pp84-86.